

異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての 「我々」と「彼等」のコミュニケーション問題 (21)

—他者の物語と記憶—

青 木 順 子

Stories and Memories Kept by Other People in Intercultural Communication Education

Junko AOKI

要 旨

他者の苦痛の出来事を記憶できなければ、歴史の中で繰り返されている継続的な構造的暴力について正しく理解することも、過去の出来事と切り離せない現在の他者の苦痛の表象に拘ることも出来ない。同一化をさせ易い「物語」はそうした出来事を理解し記憶することに有効な手段として働く一方、そこには二つの大きな困難が存在する。一つは、同一化する力で記憶を保持していく努力を求めながら、物語が「苦痛」の出来事を内在しているほど、安易な同一化をさせない努力が必要となること、もう一つは、「記憶の共同体」が再現されて、閉鎖的な「我々の記憶」を保持し、「彼等の記憶」と区別することを要求することである。幸福な未来を築くためとして彼等の被った暴力的な出来事の記憶の忘却、すなわち「幸福な忘却」を、それが存在するかのごとく要求することは、不可能なことを要求することになり、真の和解の対極に存在する行為となる。私達は正義の保証を自ら属する共同体に依るしかなく、その共同体は、他の共同体との優劣をつけて戦争を行使するという不正義を行うのであり、共同体間の戦争は、特定の共同体に属する生を守るという目的を持って、嘆かれないような死を他の共同体に属する人々には与える。異なる共同体に向ける私達自身のまなざし自体が、嘆かれる死とそうでない死に区別する共同体の規範の枠組みに基づいた「格差をともなうまなざし」となっているのである。そうした枠組みに準拠して世界を受容している自らへの厳しいまなざしが私達には求められているのである。

キーワード：異文化コミュニケーション教育、異文化コミュニケーション、異文化教育、他者のメディア表象

は じ め に

幸福に生きることは人間の自己実現に密接に関わる——そのことを否定する者はいないだろう。それゆえ、幸福に生きることの実現は、異文化コミュニケーション教育が、「教育」として、教育を受ける者の自己実現の達成を手助けする限りにおいて、その目的の一つからはずすことは出来ない。しかし、同時に、幸福という考えを扱う時、個人の幸福感という主観的な感情の充足

と、そこに存在する大多数の個人が幸福であるような、社会全体として見た時の幸福感の存在、すなわち、幸福なる社会の実現、そして、その範囲をさらに広げ、「異なる人々」の属する社会における幸福の実現、という観点を、どのようにお互いに関わらせ、扱うのかという問いが、「異文化コミュニケーション」の性質から、必然的に出てくる。それゆえ、「異文化コミュニケーション」の「教育」において、「幸福」をどのように考えていくべきなのか、この問いに答えようと一連の論稿で筆者は努めてきた。そして、「我々と彼等の幸福なる社会」のためには、「構造的暴力について正しい知識と理解を得る」努力とともに、「一人ひとりが・拘り・今・自分に・出来ることを、丁寧に問い・声をあげ、かつ、耳を傾け・異なる他者とのコミュニケーションを続け・それを通して得た真理を・実現しようとする」、その過程そのものを尊重できる人々を育てることを異文化コミュニケーション教育では目指すべきであるとした。この結論の妥当性について、本稿では、「他者の苦痛」の出来事の記憶について引き続き考えてみることで、さらに確認の作業を続けてみたい。

1. 「他者の苦痛」の出来事と記憶—私達の失敗

暴力性の強い「他者の苦痛」の出来事として多くの人々に浮かぶ出来事の一つが、2017年8月30日の7時のNHKニュースに、「被爆者・谷口稔暉さん死去」¹⁾として流れてきた。画面に突然映し出された「赤い背中」の写真にあらためて息をのんだのは私だけではないはずだ。ニュースには、「原爆は悪魔の武器です」という言葉を発する谷口氏の過去の映像が映し出される。「赤い背中」の写真と「悪魔」という表現——私達は、こんな人間の苦痛を生み出した歴史を生きているのである。ホロコーストを創出した人間が、ホロコーストのない幸福なる社会を創出できるのだろうか、悪魔の武器である核兵器を創出した人間が、核兵器のない幸福なる社会を創出できるのだろうか、という大きな疑問を人々が持つのも自然であろう。「幸福」を自身には当然のように求めながらも、「我々の幸福なる社会」で「彼ら」と見なした他者と生きることにも、「彼らの幸福なる社会」を「我々の幸福なる社会」と同じように尊重する姿勢を示すことにも失敗し続けている私達に、「我々と彼等の幸福なる社会」を築くことはできるのだろうかという疑問——それは出るべくして出るような疑問なのである。同時に、今まで一連の論稿で繰り返し書いてきたように、これこそが答えというものはないけれども、「異なる者とのコミュニケーション」を考える「異文化コミュニケーション」の教育では、その疑問に応答することを止めることはできないのである。「我々と彼等の幸福なる社会」の実現のために、この構造的暴力への正しい「知識と理解」を得る努力と、その暴力のもとで被る「他者の苦痛」の出来事の表象に拘り、声をあげ、耳を傾ける姿勢、その上で自分のできるコミットメントを見つけ、実行できる人間へと導く——を教育の目標におくべきとする時、上記のような疑問が自然におきるような現実を踏まえて前提として認識しておくべき事実がある。他者の苦痛の物語を「記憶」することが可能でなければ、歴史の中で繰り返されている継続的な構造的暴力について正しく理解することも、過去の出来事と切り離せない現在の他者の苦痛の表象に拘ることも、実際には出来ないという事実である。

そもそも「出来事」とは、その出来事に関わった者にとっては、語ること自体が大変な経験であることが多いことは、個々の人間が誰でも痛感するところであろう。「言葉に出来ないような体験だった」、「言葉にすることが不可能な想いである」と「言葉で言う」ように、言語の力に

も頼りながら、それでも、私達は、言葉の力に依存することができない次元に多くの出来事を持つのである。例えば、ジェノサイドは、その出来事の中に組み込まれた無数の出来事さえ語ることが困難である、という事実でもって、関わった人々の苦しみをむしろ知らしめるものであった。出来事の暴力性が強いほど、そうした「語り得る」ことのできない物語を現実世界は生んでいくのである。それでも、もし語り得ない物語をなぜ生む必要があるのかと聞かれるなら、たとえ困難でもそれを避けるのは不可能だと答えるしかない。なぜなら、出来事の暴力性を生きるために、私達は、物語化する必要があるのである。現実の出来事を物語化する時、私達ははじめて記憶に残すことができると感じる。実際は、多くの出来事を私達は語ることから逸してしまう。こうした出来事と物語の関わりについて、虚構の物語の作者という立場から、小川洋子が、『物語の役割』で語っているのが以下の文章である。

小説を書いているときに、ときどき自分は人類、人間たちのいちばん後方を歩いているという感触を持つことがあります。人間が山登りをしているとすると、そのリーダーとなって先頭に立っている人がいて、作家という役割の人間は最後尾を歩いている。先を歩いている人たちが、人知れず落としていったもの、こぼれ落ちたもの、そんなものを拾い集めて、落とした本人さえ、そんなものを自分が持っていたと気づいていないような落とし物を拾い集めて、でもそれが確かにこの世に存在したんだという印を残すために小説の形にしている。そういう気がします。²⁾

小川は、それを「小説を書いていると死んだ人と会話しているような気持ち」というのと同じ意味合いとし、ホロコーストで亡くなった少女の運命を10年かけて辿って記録した本を書いたフランス人作家モディアノが、その本の前書きで自分に寄せられた批評で一番心打たれたものとして紹介している言葉を挙げている。「もはや名前もわからなくなった人々を死者の世界に探しに行くこと、文学とはこれにつけるのかもしれない」³⁾と小川は結ぶ。

出来事を記す物語の同一化の力自体については誰もが理解しているところであろう。ローゼンはこう述べる。物語が誰にとっても同一化を創出する力を持っているのは、人間は「アナロジーを作る種」だからである⁴⁾。書物を読むと同一化が起こるが、それは強いだけでなく、ローゼンにとっては、「誠実な力」でもある⁵⁾。しかし、どのように何を結び付けていくか自体は「私たちの悟性の決定的な鍵」であり、議論されたゆえに訂正されることもあり得るものであり、結局は、結びつける行為自体は「私たちの所与」といえる⁶⁾。それゆえ、ローゼンは、私達がまず「試みる」ことの大切さを強調しているのである。

「私たち人間の目標のひとつは、他者の苦しみを理解しようと試みることだ。かわいそうに、と言うのは簡単だが、他人の苦しみを理解することはできるだろうか。その答えは明らかだ。他人の苦しみを理解し感じることができるのは、ただ自分自身の苦しみを通してのみである。しかし自分自身の苦しみが、それはそれで大変な苦しみであったとしても、他者の苦しみに匹敵するほどの苦しみでない場合はどうだろうか。その場合でも、人間のコミュニケーションの法則は変わらない。私たちはおのれの知っていることを懸命に活用して、おのれの知らないことにそれを結びつけることを試みなければならない。」⁷⁾

こうして「試みる」努力をする時、同一化をさせ易い「物語」は他者の物語を理解することに極めて有効な手段として働くのである。他者の物語をもって同一化する力を試みようとする努力を持って、私達が記憶を保持することができる可能性は格段に大きくなることになる。「赤い背中」を物語として、多くの人々に自ら提示し続けた谷口さんの願いもそこにあったのであろう。

原爆投下によっておこった他者の苦痛の物語の一つ、「焼き場に立つ少年」、その写真を、2018年1月、ローマ法皇がカードとして配布したという報道があった⁸⁾。1945年、長崎に原爆が投下された後、死亡した弟を背負い火葬場で順番を待つ一人の少年の姿を撮影したといわれる写真である。写真の説明とともに、「戦争が生みだしたもの」という言葉も記載されている。他者の苦痛の物語を記憶し続けることが、核兵器のない平和な世界を創造することに繋がると法皇が認識しているからこそその使用であろう。原爆にしても、ホロコーストにしても、人間が人間に課した苦痛の物語を忘れない努力が重要なのであり、「焼き場に立つ少年」の物語は、人間の同一化に強く訴える効果的な手段となり得るのである。

2. 安易な同一化をさせない努力・存在しない「幸福な忘却」

「他者の苦痛」の物語の記憶において、二つの大きな困難が存在する。その一つが、物語の同一化する力で記憶を保持していく努力を求めながら、物語が苦痛の出来事を内在しているほど、同時に、「安易な同一化はさせない」ような努力が必要となるという、相互に矛盾するともいえるような事実である。例えば、ホロコーストの記憶がそうである。

「理解の不可能性にもかかわらず、また犠牲者と同一化することを戒める警告にもかかわらず、ホロコースト証言は読まれ、読者は語り手や登場人物と同一化している。まさしくそれこそが、読書において読者が期待していることであるからだ。これを解決するには、読むことへの理解を再考し、同一化という読み方や把握という読み方が、証言の場合はきわめて問題があるということを示す必要がある⁹⁾。

上記を記したイーグルストンは、単純な同一化を拒むために取られてきたいくつもの手段をまとめて記している。例えば、「歴史資料」の挿入や「一般的注釈」を物語に入れることも一つの方法である¹⁰⁾。また、「語り手」と「登場人物」が同一なのに、「語り手」および観衆が知っていることと「登場人物」が知っていることにギャップが存在するという事実が、同一化を困難にさせることも利用もできる¹¹⁾。

「枠組み」そのものについても工夫ができる。例えば、「物語の枠組み」を与え、違う形で物語を枠づけることによって距離の保持を促進する、「形式的な枠」を与え随想の形式を利用する、などで、まさにレーヴィがしたような、随想という枠、および彼自身による念入りの自作への点検、さらにはホロコーストを経験しなかった者と自身の間には深淵があるとの繰り返しの強調によって、単純で安易な同一化は阻止される¹²⁾。このレーヴィの取った手法については、ジジェクは以下のように解説している。

「起こったことを理解することは、たぶんできない、さらにはしてはならない」レーヴィと、ホロコーストを不可侵の超越的悪へと祭り上げる流行との違いは、レーヴィが理解と知識の区別（ラカンはずっとそれに依拠していた）を導入するところである。レーヴィは「われわれはそれを理解できないが、それがどこから発するかは理解できるし、理解しなければならない……理解が不可能だとしても、知ることは絶対だ。一度起こったことは、もう一度起こるかもしれないからだ」と続ける。この知識（その機能はまさに同一の回帰を防ぐことである）は、「内側の」理解と「外側の」説明という方向で、理解と対置すべきではない。理解すべきものは何もない。それを犯した者は、自身を理解しておらず、「本人の行為の水準」に達しておらず、すなわち、自分の行為とその帰結を、主体的に引き受けなかったからだ。¹³⁾

「標識の挿入」、すなわち語り手が正確に語り手として修辭的に枠づけられ、証人でもあるこの語り手の経験を、読者が自分のものとして安易に同化することは、その結果できなくなる¹⁴⁾。「知ることと見ることの枠」を示し、不可能なことを前提とさせることになり、これも、レーヴィは彼の著書で使っているといえる¹⁵⁾。「理解の失敗のアレゴリ」——「深い記憶」にアクセスし内在することが生存者にとってさえもいかに困難であるかを理解できることも、読者による単純な同一化を防ぐことになる¹⁶⁾。

さらに、「死者の記憶」——殺された人を回想するという特定の行為で終わる証言や、「エピソード」——読者にはテキストにおいて起こる出来事が耐え難いものとなる、さらには、「中断」や「過剰な同一化」も、読者の安易な同一化を防ぐものとして挙げられる¹⁷⁾。最終的には、「終結の欠如」、つまり、ひとたび物語を語り終えると彼らはまた語り直すことこそ、証言そのもののエクリチュールの特徴であり、それが安易な同一化を防ぐのである¹⁸⁾。

結局、ユダヤ人の記憶の器になったのは歴史記述ではなく文学であるにしても、「ユダヤ人・非ユダヤ人を問わずホロコーストの記憶の器になったのは、フィクションとして理解された文学ではなく、証言というジャンル」であると、証言報告はたんに「経験を示す」言葉であるばかりでなく、「それらの経験の痕跡 […] と化した言葉」となる¹⁹⁾。

「証言は他者との遭遇だ。それはまさしく、同一化—自身の枠組みの外側の出来事を自身の枠組の内側の出来事へと還元し、他者性を同じものへと還元する把握ないし包括—が起こりえない（もしくは起こるべきでない）がゆえの遭遇なのである。」「そしてこのジャンル—それが奇妙なのは、とりわけ同一化という一般に受け入れられた過程を否定するからだ—こそが、ホロコーストの記憶には何よりも有効なのである²⁰⁾。」

記憶の器になるためには「物語」は有効であり、読者による同一化を私達は求めてはいる。しかし、同時に、ホロコーストのような出来事は、物語との安易な同一化を拒む必要がある。この矛盾したような事実こそ、「他者の苦痛」に対して、私達が真摯に向き合わなければならない理由があるのだ。「同一化」できる「物語」を他者と共有しようと継続して試みる努力、「同一化」によってその物語を理解しようと試みる誠実な力としての悟性の保持、かつ「安易な同一化を許さないような」次元にある暴力的な出来事存在を認識する力——これら三つのことが私達に同時に求められているのである。

私達が記憶の保持において直面するもう一つの困難さは、共同体の記憶の性質に関わる。往々にして「記憶の共同体」となって、閉鎖的な「我々の記憶」を保持し、「彼等の記憶」と区別することを要求する²¹⁾。そこでは、「共同体」にとって好ましくないと言われるものは、記憶の対象からも外され、好ましいものほど強く記憶され、反対に、「我々」の悪い行為については、忘却の対象として優位におかれる²²⁾。内における記憶の等質化をすすめる、外の他者の記憶は拒否するという、二つの行為が「記憶の共同体」を強力に創出していく²³⁾。そこでは、「我々」が「彼等」に与えた苦痛の出来事は、真っ先に忘却の対象となることになる。単なる「過去の出来事の忘却を」という要求は聞こえが悪いゆえに、「今からは未来志向で」というレトリックが盛んに使われることになる。「彼等」に「我々」が与えた苦痛の出来事の物語は拒み、同一化の試みも拒否する一方で、過去の「我々」が誇れると思われる出来事は、意図的に何度も物語化されて、同一化をできる物語として「我々」に記憶の等質化のために提示をされる。「幸福な記憶」が「我々」の共同体に広まることを試みる一方で、「彼等」の共同体には、過去の「我々」との不幸な出来

事の「忘却」こそが、現在、未来の幸福に繋がるとして要求するというわけだ。

そもそも暴力的な出来事を経験して、「幸福な記憶」と同じように、何らかの幸福に繋がるような忘却、つまり、「幸福な忘却」というものがあり得るのだろうか。リクルはこの問いを課して、答えは否だとし、「幸福な忘却」については語ることができない理由を以下のようにあげている²⁴⁾。第一の理由は、私達と忘却との関係は、記憶の再認のような思考の出来事によっては明示されないことにある。回想は出来事であるが、忘却は、出来事、何かが起こること、何かを起こすことではない。忘れていたことに気付く時再認するのは、忘却していた状態そのものである。第二の理由は、忘却がそれ固有のジレンマを持つことにある。記憶が、報い、賠償、赦免を生じさせる交換にまで広がる出来事に関係するとしたら、一方、忘却は、永続的状况を繰り広げ、その状況が行動の悲劇性をなすものである限りは歴史的状況といえ、そのために、行動は、忘却によって継続が妨げられる。識別できないほどに役割が絡み合うことによって、意見の対立が解消できず超えられないゆえの不可避の紛争によって、はるか昔にさかのぼる修復不可能な損害によって、妨げられる。リクルは、そこで重要となるのは、こうした絡み合い、和解できない、償い得ないという典型的状況を待ち、受け入れようとする、一時的でない作業、すなわち「無言の受け入れ」なのだという²⁵⁾。このリクルの説明に基づくならば、「無言の受け入れ」どころか、『未来志向』で2国間の幸せな関係を築こう」というレトリックで加害者側の国の方が被害者側に積極的な「忘却」を要求することは明らかに奇妙なのである。まして、「記憶」自体を変更するような「未来志向の歴史再評価」なるものまでを主張しては²⁶⁾、到底理解されないことになる。被害者側の「幸福な記憶」を阻止した加害者側が、「幸福な未来」を築くことを「幸福な忘却」（があるかのごとく）と同一のものにしようと提案することは、「幸福な忘却」とはそもそも存在などしないのだから、いわば不可能なことを一方的に非論理的なレトリックにおいて要求していることになり、要求された側の激しい反発をもたらすのである。まして、忘却を要求する記憶が、その性質において、同一化を求め、同時に安易な同一化を拒む、そうした激しい暴力的で不幸な出来事の記憶であるなら、真の和解の対極に存在する行為となるのである。

3. 帰属する共同体のない異人の場

世界の大国の政治家達によって恥ずかし気もなく声高に叫ばれている感のある「自国第一」「自国の利益優先」といったスローガン。それは「戦争」も厭わないと言っているのと同じである。こうして煽り立てられた人々は、「我々」という共同体に執着し、グローバル化した世界で「我々」を優先するために「彼等」や「彼等の共同体」を顧みなくなる可能性を増加させるのも自明である。それなら、世界に不穏な状況を生み出したくて敢えてしているのだろうか。そうした疑念までが浮かぶような現在の世界情勢では、そもそも戦争と連想で直結するような「共同体」とは「我々と彼等の幸福な社会」の実現に取って何の意味があるのだろうかとあらためて考えてしまう。2007年、今から11年前、「異文化コミュニケーション教育では共同体との存在をどのように考えるべきか」について、宮崎駿監督の『ハウルの動く城』に描かれた「物語」を原作と映画を併合する形で例として使い考察した。その論稿²⁷⁾の一部を3節・4節に転載することで、本稿の考察をすすめてみたい。

原作 *Howl's Moving Castle*²⁸⁾（『魔法使いハウルと火の悪魔』）と映画では二つの要素が異なる——映画では主人公ソフィーの家族関係についての扱いがほとんどなくなり、反戦映画といって

もよいほど戦争の要素が挿入されている²⁹⁾。元来、原作からインスピレーションを得て制作された映画が、映像という性質上、また、製作者のその時点における思想によって、原作から変更されることは珍しいことではない。実際、アメリカ公開時に、ニューズウィークのインタビューに答えて、宮崎自身が、イラクに対する戦争に対して反対であったことが『ハウルの動く城』に深い影響を与えたと語っている³⁰⁾。映画のためにあらたに原作を基に構築された物語においては、少なくされた既成の家族の扱いと増やされた戦争の扱いという二つの要素がお互いに必要不可欠だった。つまり、この二つの変更は車の両輪のように両方で初めて機能するものとして映画に表象されているのだ、と強く感じる。既成の家族という血縁、そしてその家族が定住している血縁・地縁としての共同体としての国という概念に人々が縛られない時こそ、共同体を守るために存在することになる戦争が避けられることを示唆できるからである。元々原作者も、「動く城の話を」と一人の少年が言った、その「城」が「動く」という意外性にインスピレーションを得て、物語を書いたといわれている。びくとも動かないでそびえ立つ堅守を誇る城が既成の共同体のシンボルであり続けた長い歴史の中で、その「城」が「動く」とは普通は誰も考えないわけで、「動く城」という言葉が持つ矛盾性ともいべきものに大人ははっとさせられるのであろう。どんな状況でも「動く城」は、国という共同体のシンボルにはなり得ない。すでに、「城」でありながら、「動く」時点で、従来の「城」に内在する意味を放棄しているのである。

さらに、ハウルの城は、動くことに加えて、城の扉から通ずる場所も複数以上あり、扉のノブを回すことによって自由に選べる。原作では以下のように書かれている。

There was a square wooden knob above the door, set into the lintel, with a dab of paint on each of its four sides. At that moment there was a green blob on the side that was at the bottom, but Howel turned the knob round so that it had a red blob down ward before he opened the door. (pp.59-60)

(扉の上の横木に組み込まれた四角い木製のノブがありました。四つの面のそれぞれにペンキが塗ってあります。その時、緑の面が下になっていました。しかしハウルはノブを回し、赤い面を下にして扉を開けました。)

もし国という共同体のシンボルの一つとして存在してきた城が、「ハウルの動く城」のように、自由に動き回ることに加え、その扉を開ける度に、違う場所へ導く城であれば、人々は帰属するべきたった一つの共同体、守るべき共同体といった幻想に惑わされることもない。死を賭しても守るべき共同体の幻想から抜け出せないで、戦争や闘争を続ける世界の現状の中で、「ハウルの動く城」に乗ることができたらと思う人々が多いはずだ。その城に乗っている限り、「我々」の国を守る、という言葉のもとに、多くの若者が選択肢はないと思い込んで戦場に向かい帰って来なかった、その歴史の繰り返しから自由になる。映画で、ハウルの城に来た国王からの使者が言う。「国王陛下からの招請状です。いよいよ戦争ですぞ。」「魔法使いも呪い師も 魔女ですらみな国家に協力せよとの思召しです。」「必ず出頭するように。」——国の名のもとにみな協力せよ・いやすべきだ、と人々に責任と義務を課して、はじめて戦争は遂行される。ソフィーは、ハウルに戦うのを止めさせようと、戦火に包まれた自分の故郷の町に留まる城を動かそうとし、城は半崩壊する。その住人を守るために戦うことを余儀なくさせるような存在の「城」であってはならないのだ。だからハウルの城を動かす理由をソフィーはこう言うだけでいい。「私たちがここに在る限り、ハウルは戦うわ」。

上記のソフィーの言葉に対して、コミュニタリアンであればすぐにこう批判するであろう。彼

女の言葉は自己の自由な利害にのみに生きる者の無責任な発言で、現実の世界では、故郷の町が炎につつまれているにも関わらず、城を動かして去ってしまおうとする彼女のような人間は、共同体の期待する健全なアイデンティティの持ち主ではないのだろうと。それでは、コミュニタリアンが言うように、共同体の善を優先して考えない時に私達はその共同体にとっての善を共有することから得るのであろう健全で責任あるアイデンティティを持つことも出来ず、さらには、正義のために共同参加していくような人間関係も存在しないのだろうか。そして、無責任な個々の人間が集まっただけで、正義のために個人が結びついていく、そんな意味ある正義の生まれる余地がない、ただ個人の自由だけをそれぞれが勝手に追い求めるような結果をもたらすのだろうか。『ハウルの動く城』ではそれに対しても答えを用意している。

城には、帰属する場がない者ばかりが集まってくる。90歳の老婆への突然の変身であるために黙って家を出てきて、血縁がないのと同じ状態にあるソフィー、同じく身寄りが無いという点で全く頼るべき血縁関係のない、ハウルの弟子となっているマルクル、王子からカブに変えられたため呪いが解ける日まで王宮を出ているカブ頭、そして魔女、魔法使い、それも特に国に仕えることをしていないゆえに危険な力を持ったとみなされる魔法の使い手達で、一人は、魔力をなくし無力化した後、城で世話をしてもらった「荒地の魔女」、もう一人は、優れた魔力を持ちながら、王室を出て帰属するところはなく、複数の名前を使い分けて、様々な場に出現する、城の持ち主であるハウル自身——この5人に共通なことは、普通の社会が異人として排除しやすい者であるという、その否定できない異人性である。

こうした異人は、本来「実体概念」ではなく「関係概念」であると赤坂が書いている。「＜異人＞表象＝産出の場にあらわれるものは、実体としての＜異人＞ではなく、関係としての＜異人＞、さらにいって＜異人＞としての関係である。ある種の社会的な関係の軋み、もしくはそこに生じる影が＜異人＞である、といってもよい³¹⁾」。社会制度は眼に見えないが、その社会のコードを共有する者だけを構成員とする一方、異和性を持つものを摘出して、周縁に置く。異人は内集団イコール我々に対して、否定的アイデンティティを表象する、「存在的に異質かつ奇異なもの」となる³²⁾。「彼ら」を意識する時、「我々」は「我々」としての仲間意識のうちに結束する。本当は「我々」も相互間で理解し合っていないのだが、そうした相互間の不理解という異和的なずれは「彼ら」という第3項の出現によって「仲間意識」の内に解消されてしまい、問題にされなくなる。そして、日常生活の現実には存在するが、中心になり得ないゆえに境界に位置付けられている「異人」があり、それは内部の「異和的」部分の投射であるゆえ、排除のメカニズムを受け周辺に追いやられているのである³³⁾。その排除の構造といえるメカニズムには例外がないと赤坂は言い切る³⁴⁾。

4. 共同体なき共同体

しかし、共同体から望ましくない人間像として排除の対象となる異人の場としての「ハウルの動く城」は、単なるアジールというだけで終わらない。こうして周縁に追いやられたものを受け入れる場所は、迎え入れる者の取捨選択をしない極めてオープンな場で、来る者を全て住人として受け入れる。原作でも、マルクルはハウルの城にのみ彼の居場所を見つけたことをソフィーに語る。

"My mother died and my father got drowned in a storm," Michael said. "And nobody wants you when that happens. I had to leave our house because I couldn't pay rent, and I tried to live in the streets, but people kept turning me off doorsteps and out of boats until the only place I could think of to go was somewhere everyone was too scared of to interfere with. Howl had just started up in a small way as Sorcerer Jenkin then. But everyone said his house had devils in it, so I slept on his doorstep for a couple of nights until Howl opened the door one morning on his way to buy bread and I fell inside. So he said I could wait indoors while he got something to eat. I went in, and there was Calcifer, and I started talking to him because I'd never met a demon before." (p.131)

(「母さんは死んで、父さんも嵐の中溺れ死んだのです。」とマイケルは言った。「そして誰もそれが起きた時に僕を置いてくれませんでした。家賃も払えず家を追い出され、通りで暮らそうとしたのですが、人々が僕を軒先からも船からも追いやってしまうので、僕が行けるところは、みんなが怖がって来れないような場所だと考えたのです。その時、ハウルさんは、小さいながら魔術師ジェンキンソンとして開業したところでした。しかし彼の家には悪魔がいるってみんな言っていたのです。だから、その軒先で数日寝ました。ハウルさんがある朝パンを買いにいくために戸を開けて、僕は中に転げこみました。そうしたら、彼は、食べるものを買ってくるから中にいなさいと言ってくれたのです。中にはいったら、カルシファーがいて、彼に話しかけました。だって前に悪魔に会ったことがなかったのですから。)

映画では、ソフィーに老婆となる呪いをかけ、ハウルを長く苦しめてきた「荒地の魔女」でさえ簡単に受け入れてしまうのである。そのため、それまでに起きたことだけでいえば対立してもおかしくない関係の者達が混在するのだが、それにも関わらず、擬似家族を形成していき、まさに積極的人間関係生成の場となる。映画で何度も意図的に使われる「家族」という言葉、「わが家族はややこしい者ばかりだな」とハウルは言う。本来のソフィーの家族であった継母の方は、国に命令されて嫌々であるとはいえスパイとしてソフィーのところに来て、密かに「のぞき虫」を置いていくことさえするが、一方、その直後に、この擬似家族のマルクルの方は、ソフィーに抱きつき「僕ら、家族？」と聞く。「そう家族よ」と答えるソフィーに「良かった！！」と叫ぶ。映画でこの城に住む残り二人は、意志を持って城に来て住んでいる点について、ソフィー達とは異なる点がある。契約のため城の暖炉に住むしかない悪態を吐き続ける悪魔カルシファーと、キングズベリーの王室付きの魔法使いサリバンから指令を受けた使い犬ビンである。前者は契約のため嫌々城にいるのだと言い続け、後者は、王室付きの魔法使いのスパイとして遣わされているという設定である。カルシファーもビンも、元々帰属していたはずの場に存在していないという点では、他のみんなと同じ「異人」であるが、経緯だけみれば、城に仕方なく存在する者達である。しかし、ビンは、帰属していた王宮に一度も戻りたがることなくソフィーにすぐになつき城になじむ。カルシファーも契約が破られなければ立ち去れないために悪態をついていただけで、自分がそこにいるようになった経緯は理解している。原作でも同じように存在し、共通点の多いままのカルシファーの言葉からそれをとってみよう。流れ星で落ちて死ぬ運命だったカルシファーに何が本当は起こったかについて、彼自身がソフィーに語る。

"Five years ago," said Calcifer, "out on Porthaven Marshes, just after he set up as Jenkin the Sorcerer. He chased me in seven-league boots. I was terrified of him. I was terrified anyway, because when you fall you know you're going to die. I'd have done anything rather than die. When Howl offered to keep me alive the way human stay alive, I suggested a contract on the spot. Neither of us knew what we were getting into. I was grateful, and Howl only offered because he was sorry for me." (p.247)

「5年前のことなんだ。」とカルシファーは言った。「ポートヘイブンの湿原で、ハウルが丁度魔術師として開業したばかりさ。彼は、7リーグの靴で僕を追いかけて、僕は怖かったんだ。どっちにしても怖かったんだけどね。だって、落ちた時点で死ぬわけだから。死ぬ位なら、何だってしたな。だからハウルが人間が生きていられるようなやり方で、僕を生かしてあげようかって言ってくれた時、その場で契約を結んだんだ。二人ともどうということになってしまうのかわかっていなかったんだ。僕は感謝したよ。だって、僕を可哀想と思ったから彼はしてくれたのだからね。』」

一旦結ばれた契約のために、ハウルの心臓を自分の中に抱えて、カルシファーは城を離れることはできない。ハウルにもカルシファーにもそれは変えられない。誰かが契約の内容を見破ってくれない限りは変更不可能なのである。その自由な選択の欠如がカルシファーには苦痛である。そして、ついに契約の秘密を理解したソフィーに解放たれることになる。カルシファーにとっても、ハウルにとっても危険を伴う決断である一方、ハウルを本当に救うためには必要な行動でもある。原作と映画が一番一致している箇所の一つである。

“Calcifer,” Sophie said, “I shall have to break your contract. Will it kill you?” “It would if anyone else broke it,” Calcifer said hoarsely. “That’s why I asked you to do it. I could tell you could talk life into things. Look what you did for the scarecrow and the skull.” “Then have another thousand years!” Sophie said, and willed very hard as she said it, in case just talking was not enough. This had been worrying her very much. She took hold of Calcifer and carefully nipped him off the black lump, just as she would nip a dead bud off a stalk. Calcifer whirled loose and hovered by her shoulder as a blue teardrop. (p.324)

「カルシファー」ソフィーは言いました。「私、あなた達の契約を破らなければならないの。そうしたら、あなたは死んでしまうの?」「もし、他の誰かがしたらね。死ぬね。」カルシファーはしゃがれ声で言った。「だからソフィーに頼んだんだ。君なら、物に命をふきこめるからね。かかしや頭蓋骨にしたことを見ろよ。」「じゃあ、千年あなたが生きることができますように。」ソフィーはそう言って、口に出すだけでは不安で、心でも強く願ったのです。ずっと心配だったことだからです。カルシファーをつかみ、黒い塊を彼から注意深く取りだそうとしました。丁度、茎から枯れたつぼみを取りだすようにです。カルシファーは、ぐたっと回って、青い涙の一滴のようになって彼女の肩にぶらさがりました。)

危険な行為であったが、それは報われる。カルシファーは命を失うことなく自由となる。その喜びは大きい。

“I feel so light!” he said. Then it dawned on him what had happened. “I’m free!” he shouted. He whirled to the chimney and plunged up it, out of sight, “I’m free!” Sophie heard him shout overhead faintly as he came out through the chimney pot of the hat shop. (p.324)

「わあ、すごく軽いよ。」と彼は言いました。それから、何が起きたかわかってきたのです。「僕、自由だ。」彼は煙突につっこみ、あがって行って姿を消しました。「僕、自由だ。」ソフィーには、帽子店の煙突から飛び出して行く時、彼が叫んでいるのが、かすかに聞こえました。)

しかし、原作でも、映画でも、自由となりいったん出ていったはずのカルシファーは戻ってくる。映画ではこう言う。「オイラみんなといたいんだ。」「雨も降りそうだしさ……。」。契約から解放され自由になって出ていった彼の言葉を、原作から少し補ってみたい。「戻ってくることはなかったのに」と言われたカルシファーの返答である。

“I don’t mind, as long as I can come and go,” Calcifer said. “Besides, it’s raining out there in Market

Chipping.” (p.329)

(「自由に行き来さえできるなら、構わないんだ。」とカルシファーは言った。「それに、今雨が降っているしね。」)

「自由に行き来さえできるなら、構わないんだ。」帰属すべき場を最初から決め付けられることなく、私達を選べるなら、どんなに多くの無駄な争いや葛藤から自由になれることだろう。こうして、最終的には、ヒンとカルシファーも自ら選択してハウルの城に留まる事実が、そこが帰属する共同体からはみ出た者の悲しい吹き溜まりではなく、希望をもたらす場であることを示している。

映画では、この共同体からは期待されない人間である異人達は、共同体の規範としての共通善からは自由で、それぞれの立場で他者のことを考えて自分の正義を選択して行動する。本当は臆病で、自分が自由に生きるために「動く城」にいたはずなのに、ソフィーを守るためには、戦火に出ていくハウル（「なぜ…？僕はもう十分逃げた。ようやく守らなければならない者ができたんだ…」）、自分の方が幼く小さいのに甲斐甲斐しく回りを気遣ってみせるマルクル（「おばあちゃん大丈夫だよ。僕がついてるからね。」）、自分自身の死の危険があるのにソフィーを勇気付けて、ハウルを救うための行動をさせるカルシファー（「心臓をハウルに返したら あなたは死んじゃうの？」「ソフィーなら平気だよ たぶん」「オイラに水をかけても オイラもハウルも死ななかったから…」「やってみるね」）、生きた心臓に対する魔女の本能ともいえる執念を捨て最後はソフィーに手渡した「荒地の魔女」（「そんなに欲しいのかい？」「仕方ないねえ」「大事にするんだよ」「ホラ…」）、自分の体を支えにして城の墜落をとめ全員を助けようとしたカブ、魔物と化しつつあるハウルのところにソフィーを導いて連れていくヒン、そして自分を害した・害するかもしれない者も含めて、誰よりも他者の受容を示し、最後はハウルの魔王化を止めるソフィー、それぞれが、共同体が共通の善としての正義の遂行を望むからではなく、自己の解釈に基づいて、まさに井上³⁵⁾が書いたような、自己の自由を他者の自由によって試練にかけて最終的に、その正義を遂行するのである。個人の自由な無限追求や耽溺ではなく、他者の受容を持って、むしろ正義という試練によって鍛えられる自由として存在する正義を示してみせるのである。

極めて多様で異質な者たちが、自己の選択において正義を実現し、その結果として個々の善き生が実現し、その正義の行使において、いつのまにか擬似家族化し得る「ハウルの動く城」の住人におけるような関係を他者との間に築くことができるのであれば、コミュニタリアンが前提として存在するのだと主張する血縁・地縁からなる共同体だけが、唯一個人に安定したアイデンティティを生成し肯定的な人間関係をもたらすものとして機能するわけではないのであり、共同体の共通の善き生を実現する正義だけが個人の善き生を保証するものでもなく、共同体の象徴としての大地にそびえたつ堅固な「城」は必要ないことになる。結局、帰属する場を持たない者のように見える異人たちも、実は、共同体にとっての望ましい人間である必要から自由に存在できる、自分の帰属さえ選択できるという自由を持って住んでいるのであり、他者の受容を持って、正義を試練にかけてそれぞれ個人が遂行することにおいて、擬似家族としての人間関係を築き、私たちにもっと約束をもたらすような、まさにバタイユ的な「共同体なき共同体³⁶⁾」を形成しているのである。

これは、ブランショの言う「明かしえぬ共同体」でもある。そこでのコミュニケーションは、「言葉を介しての通い合いでもなければ、思想の相互理解でも心情の同調でもなく、言われたことよりも言うという行為そのもののうちに表明される何ものか、おのれを投げ出すことの中で

れ知らず果たされるいっさいの幻想を離脱した触れ合いであり、だからこその共同体は、＜共同体をもたない人びとの共同体＞、そして、それを生きた人びとがそれについて語る機能すらもちえない＜明かしえぬ共同体＞と呼ばれるのである。³⁷⁾ また、デリダの言うところの「来たるべき共同体」でもあり、共通の思想でお互いが繋がれるということがないという意味では「弱い共同体」だが、同時に、強さを必要とする³⁸⁾。：「見知らぬ者を歓迎しつつも或る種の共同体の意味を維持することであり、他者をくつろがせる一方で、自分は家の主人であり続けること」が出来、「なんらかの統合への集合することを禁じられた共同体」という「不可能なものの可能性を経験し試みる」のであるから。『ハウルの動く城』における二つの城——ハウルの城とキングズバリーの王宮——での対照的ともいえる歓待も、デリダの共同体の「歓待性」の説明で納得できるだろう。小説での王宮も、その点は同じである。

Sophie was feeling decidedly queer again when they reached the Palace. Its many golden domes dazzled her. The way to the front entrance was up a huge flight of steps, with a soldier in scarlet standing guard every six steps. The poor boys must have been near fainting in the heat, Sophie thought as she puffed her way dizzily up past them. At the top of the steps were archways, halls, corridors, lobbies, one after another. Sophie lost count of how many. At every archway a splendidly dressed person wearing white gloves—still somehow white in spite of the heat—inquired their business and then led them on to the next personage in the next archway. (p.185)

(王宮に着くと再び、ソフィーはひどく気分が悪くなりました。多くの金色のドームが彼女をくらくらとさせました。正面の玄関に向かう方向には、大階段がありました。6段毎に真紅の服を着た兵士が立っています。可哀相な兵隊さん達は、暑さで気絶しそうに違いないわ。ソフィーは彼等の側をふらふらになって息を切らして通りながら思いました。階段の上まで来ると、アーチ通路、広間、廊下、ロビー、が続きます。ソフィーは一体いくつそれらがあるのかもわからなくなりました。どのアーチ通路の下にも、この暑い中でもなぜだか白い手袋をはめた素晴らしく着飾った人が立っています。訪れた者に用件を聞いては、次のアーチ通路に立っている者に引き継ぐのです。)

ハウルの城では、そこを訪れる者は「くつろいでください」の言葉を言われることなく、ただそこにいるべき者としてくつろぐことができるのである。原作で、ソフィーがそれにはっと気づく瞬間がある。

"No, no!" she said. "Howl has been very kind to me." And this was true, Sophie realized. Howl showed his kindness rather strangely, but, considering all Sophie had done to annoy him, he had been very good to her indeed. (p.293)

(「違う、違うの。」と彼女は言いました。「ハウルはずっととても親切だったわ。」そして、これは本当なものでした。ソフィーは分かったのです。ハウルは、かなり奇妙な形ではありますが、彼の優しさをずっと示してくれていたことに。彼を困惑させたソフィーの行動を全部考えてみるなら、彼は彼女にとってもよくしてくれていたのでした。)

映画では、ハウルの城と対照性を示す王宮の可笑しさを、はっきりとソフィーに口にさせる。キングズバリーの王宮は、招かれたはずのソフィーや「荒地の魔女」に、延々と無意味なまでに長く続く階段を上ることを要求し、ついに上りきったソフィーにこう言わせるのである。ソフィー：「それより、あの人（「荒地の魔女」）を助けてあげなさいよ。」兵士：「お手をお貸しすることは禁じられております。」ソフィー：「なによ。来いって言ったのは王様じゃない」。その後、疲れ果てた「荒地の魔女」は、彼女は椅子に座り込み、そのまま無力化させられる。ソフィーは

言う。「ハウルがなぜここへ来たがらないのかわかりました。」「ここは変です。招いておきながら年寄りに階段を上らせたり、変な部屋に連れこんだり　まるで毘だわ。」既存の共同体は、本質的には、『われわれ』が『他者』に対して講じる防御』に基づいており、従って「歓待性」ではなく「非歓待性」の観念に基づいて築かれており³⁹⁾、ソフィーは、まさに、そうした共同体であるキングズベリー王宮の本質を指摘したのである。一方、「歓待性は、もし歓待性そのようなものがあれば、歓待性を超えている⁴⁰⁾」ゆえに、ハウルの城での「歓待性」を見る時、私たちは強い羨望ともつかぬ感銘で胸をしめつけられるのであろう。「来るべきもの」であって、自分達には未だ経験できていない歓待性をそこに見るのだから。そして、その城は、「城」に囚われているために避けられない「我々」と「彼等」の間の暴力の連鎖が毎日のように報道される世界に住む者たちにとっては、本来の「城」という言葉からイメージされる血縁・地縁としての共同体を守るための戦争からは一番遠く離れて存在することを人々に可能にしているがゆえに、さらにいっそう憧憬せずにはいられない城なのである。

以上のように展開した論稿を私は以下のような結論で終えている。

私たちの正義は、血縁や地縁で帰属が固定された共同体の共通善としてではなく、集団への帰属が選べることを想像しうる自由な存在としての個々の人間の選択として決められる——これが、今の時点で考える「異文化コミュニケーション教育」で教えるべきであると考えた正義のあり方である。個人の存在の前に共同体の存在がある、個人の自由を無限に追求する我侭につながる、といったコミュニタリアンの批判を考慮してもなおかつ、他者を受容し、原初状態を想像し、今存在している他者になることへの可能性に開かれている独立した個々の人間が、努力して維持しようとする正義、その正義でつながっていく「共同体なき共同体」というものを考える方が、はるかに平和な世界を約束するのは確かだからである。そして「正義」ということを異文化コミュニケーション教育で学生と一緒に考える時、学生たちが、共同体の共通善としての正義を掲げた戦いで、守るべき共同体のシンボルと化した城砦の守り手としての自分ではなく、城の扉の向こうには世界のどこにでも開け得る、「我々」と「彼等」の境界が存在しない浮遊する「ハウルの動く城」に乗っている自分を想像してくれば、と願わずにはいられない。少なくとも、そこからは「我々」と「彼ら」の正義ではなく、「我々」にとっても「彼等」にとっても最重要であるという意味で高く掲げるのにふさわしい、別の「正義」を見つけることができる可能性があるからである。映画で描かれた戦争は小説には存在しないが、ハウルやソフィーの性質や、彼等の人間関係は変わっていないと言ってもよい。だから、原作で、ハウルについてソフィーに教えた時、マルクルが言ったことが、ハウルの共同体への一貫した姿勢なのである。“He hates being pinned down to anything.” (p.61) (『彼は、何かに縛り付けられるのが嫌なんだ。』) ハウルは、共同体に固執しないヒーローなのである。だから、彼には分かる。映画で、花畑の上空を進んでいく軍艦を見て、ハウル「こんな所を通るなんて」ソフィー「軍艦…」ハウル「町や人を焼きに行くのさ」ソフィー「敵？ 味方？」ハウル「どちらでも同じことさ」——「われわれ」と「かれら」の正義に囚われない時、どの地に降りかかる戦火も「どちらでも同じ」、ただ人類への愚行となることがある⁴¹⁾。

11年前の2007年の時点で、上記の結論は私には最善の答えのように感じられた。しかし、次第に、これに固執しては「異文化コミュニケーション教育」の目標とすることを見つめる目的は達成されないと思うようになる。普通の人々が自分の帰属している既存の地縁・血縁からなる「共同体」の外で生きることの危うさが認識されるような、自身の共同体が幸福なる社会でなくなり立ち去るしかなくなった人々の被る多大な苦痛と犠牲、別の共同体の幸福なる社会に入ろうとすることで受ける不寛容な行為、暴力を伴う激しい攻撃、といった「移民」をめぐる出来事が、年々世界で常時報道されるニュースとなっていくからである。

5. 共同体・戦争・希望

毎日のように移民に関する苦痛の出来事の報道を聞く今、認めるしかないことがある——自分を守ってくれる共同体に属することに固執しないでいられる者とは、「自由に城を動かし空を浮遊できる魔法使い」だけであること。たとえ、多様で異質な者たちが、自己の選択において正義に基づく個々の善き生が実現し、擬似家族化し得るようなバタイユ的な「共同体なき共同体」を築けたとしても、そこから世界を見て、「我々」と「彼等」に境界を引かないような素晴らしい思考ができるとしても、本当に例外的な生。血縁・地縁からなる共同体だけが、唯一個人に安定したアイデンティティを生成し肯定的な人間関係をもたらすものとして機能するわけではないことは分かる。それでも、「ハウルの動く城」のように、空中に浮遊して地上の共同体に属さない自由を行使し、同時に、望む時にだけ、必要な時だけ、地上の共同体の一員としての生活を享受する選択を持つには、「魔法」がいるという事実は、もっと無視できないことなのだ。「ハウルの動く城」では扉のノブを回すだけで扉の外を選択できるが、その一見自由に見える選択においても、野原や荒地以外の地上の既存の「共同体」に属するためには、その「共同体にある既存の建物」に「動く城」がそっくり入り込む形が必要となる。共同体の建物の一つとなっている、つまり、共同体の住人である（ふりができる）ゆえに、扉の外に出て行って、人々に「普通に」受け入れてもらえるのだ。移民となった人々の苦痛の出来事を聞き、移民となることなど考えもしないし、考えたくもない自分を強く意識する時、理想の共同体としては「ハウルの動く城」を描き、生き方としては、その城の住人のごとくありたいとしても、帰属する共同体に属し、その場において、共同で存在する努力をする過程において、「我々」と「彼等」の正義の区分に囚われないような思考を持てる努力をする、そんな人間の育成を異文化コミュニケーション教育では目標として考えていくべき——それを認めるに至ったのである。そして、属する共同体で存在するということは、そこでの政治的決断に積極的に加わることを要求することになる。共同体は文化の一步——フロイトはそう説明した。個人が剥き出しの暴力に対抗するには、多数の人々が団結して、「法」でもって対抗する必要があると⁴²⁾。文化の次の一步は、正義の要求であり、法の秩序が個人の利益のために破壊されないように保証をする⁴³⁾。正義の最終段階は、共同体のすべての成員が、「自分の衝動を抑止して正義に貢献し」、かつ、共同体のすべての成員が、「正義によって保証される状態」である⁴⁴⁾。フロイトによれば、個人の発達プロセスは、利己的な自分の幸福を実現しようとする営みと、利他的な、他人と結びついて共同体を作り出そうとする営みとの、二つの努力の相互に鑑賞しようとする営みであり、文化的プロセスは共同体を作り出すことが目的になって、個人の求める幸福の実現が背景化することになる⁴⁵⁾。言い換えれば、個人はみな「自分の幸福を実現し、人間の共同体に参加するという二つの努力のあいだの『闘い』を経験しなければならない。」⁴⁶⁾。

そのフロイトは、アインシュタインからの「人間を戦争の脅威から救い出す方法はないものではないか」という問いに答えて、文化の一步である共同体の間の戦争を避けられない人間について極めて悲観的といえるような見解を記したのである⁴⁷⁾。人間は、無意識のうちに、自分の死という考えを拒否し、見知らぬ人の死を願い、愛する人に対しても分裂した感情を抱くのだと説明し、「戦争がこの対立した状態をうまく利用することを示すのは簡単なこと」、なぜなら、人間にその要求そのものがあるからとする——「戦争によってわたしたちのうちで後代に形成された文化的な層が剥ぎとられ、中に潜んでいた原始人がふたたび前面に登場するのである。戦争におい

てわたしたちはふたたび、自分が死ぬことを信じない英雄となることを強いられる。見知らぬ者を敵とみなし、敵を死にいたらしめ、敵の死を願わせるのである。そして戦争はまた、わたしたちに愛しい者の死を耐え抜くように励ますのである。」とまで言う⁴⁸⁾。それゆえに、戦争は廃絶することができないものであり、民族の存在の条件が大きく異なり、その民族間の反感も強い現状では、戦争はなくなることはないとし、「わたしたちは戦争が存在することに諦めの念を抱き、戦争に自分を合わせていくべきではないのだろうか」と記す⁴⁹⁾。

しかし、憎悪と破壊という人間の精神の病をあげて悲観的な見解を記した、そのフロイトも、同じアインシュタインとの交換書簡で、「希望」を記しているのである。フロイトは、共同体の間の暴力、戦争の前に、共同体を形成する暴力の存在を指摘する。共同体は多数の人が団結することで一人の暴力に対抗する形で成立をしたのであるが、同時に、この共同体の権力も暴力であり、共同体に逆らおうとする人には暴力を行使しようとする⁵⁰⁾。共同体の法律による支配は、二つの源泉のために不安定になり、その一つは、支配者側のもので、共同体のすべての成員が従うべきものとされた法の支配をやめて、暴力が支配する状態に戻そうとするからであり、もう一つは、抑圧された人々の側のもので、抑圧された人々は、法を修正して自分たちの力を強め、それを支配者に認めさせようと絶えず試みる⁵¹⁾。その中で戦争を防止しようとするには、エロスの欲動に訴えかけることが必要であり⁵²⁾、第一の絆、愛する対象との絆で、第二の絆は、同一化であるとし、人間の間に大きな共通性を作りだすものは何でも、こうした一体感を、同一化を生み出すのだとする⁵³⁾。理想とすべき状態は、自分の欲動を理性の命令にしたがわせる人々の共同体であり、これは考えることはできても実現できないユートピアの願望であるにしても、このような共同体で人々のあいだに生まれる結合は完全で、逆らうことのできないもので、そこでは感情的な絆が不要になる⁵⁴⁾。さらに、文化の二つの重要な特徴を挙げ、一つは知性の力が強くなり欲動をコントロールし始めたこと、もう一つは攻撃的な欲動が主体の内部に向かうようになり、これが様々な好ましい結果をもたらすとともに、危険な結果をもたらしていること、とする⁵⁵⁾。そして、この文化の二つの要素、すなわち文化的な姿勢と、将来の戦争のもたらす惨禍に対する根拠のある不安という要素が相まって、「近い将来に戦争はなくなると期待するのは、ユートピア的な希望ではないのかもしれませんが」と結んでいるのである⁵⁶⁾。

私達が、知的で理性のある大多数の決断で意思決定されるような共同体を少しでも継続的に安定して築くことに努力を向ければ、その共同体の住人が正義の法のもとで他者の人間性や権利を保持できる可能性も増し、さらには、文化的な姿勢を持つことで、共同体内で秩序を維持する正義はその共同体を超えて適用するべきだという考えの広がり、閉鎖的な記憶の共同体ではなく外へ開かれた共同体となる可能性、「我々」の共同体の境界を超えて、「彼等」を含めた広い共同体として思考できることでの「我々と彼等」の一体感、「我々と彼等」が互いを理解できる手段としての物語の同一化の過程を試行する努力の可能性、人間に惨禍しかもたらさない戦争を避けようとする努力の拡大も、少なくともより可能にはなるはずだ。実際、多くの人が、こうした可能性を信じて、それぞれの場で関わることでできる活動においてひたむきに努力をしている姿、私達は知ってはいるのだ。見てはいるのだ。知性と理性に基づく共同体を築こうとする努力、文化的な姿勢を保持する努力、共同体を超えての正義の適用をする努力、広がりをもった共同体として同一化の力を試行する努力、その上で、ホロコーストさえ引き起こす人間である事実の認識、他者の苦痛の記憶の尊重、記憶の共同体となることへの抵抗、安易な同一化ができないような出来事・戦争が存在してきた歴史と惨禍の強い認識——こうした行動を複合的に同時に試み続

けることで、私達には希望はあるはずだとも分かっているのだ。ただ、その希望を生み出すためには、自らの共同体内での「行動」を要求されているのは「私達」、さらには、まず「自分」であるとの覚悟が必要なのである。

お わ り に

共同体間の「戦争」は避けられないものなのだと言われても、ハウル達のように浮遊し続ける城に居住し、地上の共同体に属さない生き方を選ぶことは、私達は出来ないのである。自らを守ってくれる正義を一人でも維持できるような特別の魔法を使えない以上、私達は正義の保証を帰属する共同体に依るしかない。しかし、その共同体は、例外なく、その内部においては「異人」の排除をする排除の構造を持ち、他の共同体に対しては優劣をつけて戦争を行使するという不正義を行う。バトラーは、「悲嘆をもたらさない死」、元々生きていると見なされていなかったために、「悼まれることの無い死」があり、戦争は、特定の共同体に属する生を守るという目的を持って、そうした死を他の共同体に属する人々には与える、いわば、「世界を嘆きうる生とそうでない死」に分けていることを指摘する⁵⁷⁾。共同体がその境界を作るにしても、私達はそれによっておこる不正義を見て受け入れている主体である。そうした私達の日々目撃している不正義について、私達自身が持つ解釈の枠組み自体が、「わたしの生と存在とが委ねられているような集団と、わたしの生と存在とに対する直接の脅威を表象する集団とを、暗黙のうちに区別することによって機能する」⁵⁸⁾。異なる共同体に向ける私達自身のまなざしが、すでに誰の生が尊重されるべきか、誰の死が嘆かれるべきか、誰の生が悼みうる必要があまりないものか、を区別する規範の枠組みに基づいた「格差をとまなざし」なのだ⁵⁹⁾。だから、その枠組みそのものに批判を向ける行動、枠組みへの批判的介入が必要なのであり⁶⁰⁾、「非暴力」の実施のために「非暴力」が立ち向かわなくてはならないゆえに、行動は社会的・政治的闘争となる⁶¹⁾。

現時点では、本稿の最初に掲げた——「構造的暴力について正しい知識と理解を得る」努力とともに、「一人ひとりが・拘り・今・自分に・出来ることを、丁寧に問い・声をあげ、かつ、耳を傾け・異なる他者とのコミュニケーションを続け・それを通して得た真理を・実現しようとする」その過程そのものを尊重できる人々を育てる——は、変更することなく目標としておくことができると考えている。敢えて一つそこに加えるなら、自らの「格差をとまなざし」に気付く、つまり、そのまなざしの枠組みに準拠して世界を受容している（からこそ、平穏に生きている）自分自身に向ける厳しいまなざしの必要であろう。しかし、上記の過程を実行できるような人間には、自らに向けるまなざしの厳しさが生まれていると考えてもいいのではないだろうか。

「ポストモダン・ヒューマニズム」の一つの役割とは、自らの脆弱さと潜在的な偽善性に震え上がるほど恐ろしいまなざしを向けながら、自らを絶えず監視することである。その一部として含まれるのが、この過程が何なのか詳細に考察し分析すること、そしてその個別的、普遍的機構が、それぞれの例においてどのように動くのかを見ようとするのであろう。」⁶²⁾

最終的に「真理を・実現しようとする」行動が、必然的に、自らの共同体内での社会的・政治的闘争となっていくことに伴う覚悟の在り方については、紙面の関係で考察の機会をまたあらためて持ちたいと考えている。

引用文献

1. 「長崎原爆で焼けただれた自身の『赤い背中』の写真を掲げて核兵器廃絶を訴え、日本の被爆者運動をリードした日本原水爆被害者団体協議会（被団協）代表委員で、長崎原爆被災者協議会（長崎被災協）会長の谷口稜暉（すみてる）氏が30日午前3時45分、十二指腸乳頭部がんのため長崎市内の病院で死去した。88歳。郵便局員だった16歳の時、長崎の爆心地から1.8キロの住吉町で、自転車に乗って配達中に被爆。熱線で背中に大やけどを負い生死をさまよい、激痛と苦しみのあまり『殺してくれ』と叫んだ。うつぶせのまま過ごした1年9か月を含め、入院生活は3年7か月に及び、奇跡的に一命を取り留めた。その後、被爆者運動の立ち上げに加わり長崎被災協には1956年の発足時から参加、2006年から会長を務めた。10年には被団協の代表委員に就任。8年度から8月9日に長崎市長が読み上げる長崎平和宣言の起草委員を務めていた。被爆地を訪れる修学旅行生に被爆体験を精力的に語ったほか、核兵器の恐ろしさを世界に知ってもらうため海外に25回渡航。大やけどを負った背中の写真を掲げ核廃絶を訴えた。10年には米ニューヨークの国連本部で開かれた核拡散防止条約（NPT）再検討会議に合わせ渡米し、非政府組織（NGO）セッションで各国代表らに被爆体験を証言した。被爆70年を迎えた15年8月9日の平和祈念式典では被爆者代表として2回目の『平和への誓い』を読み上げ、多くの命を奪った核兵器と戦争への怒りをあらわにしたほか、安全保障関連法の成立を図る日本政府を批判した。」（長崎新聞 平成29年8月30日）
2. 小川洋子 『物語の役割』 筑摩書房、2007年、p.74.
3. 小川、p.77.
4. イーグルストン、ロバート 田尻芳樹・大田晋（訳）『ホロコーストとポストモダン』 みすず書房、2013年、p.45.
5. イーグルストン、p.49.
6. イーグルストン、p.45.
7. イーグルストン、p.46.
8. 「ローマ法王フランシスコが、長崎原爆投下の被害者の姿をとらえた1945年の写真をカードに印刷して配布するよう指示を出していることが1日までにわかった。カードの裏には、法王の要請により『戦争が生み出したもの』という言葉が記載されている。この写真は、死亡した弟を背負いながら火葬場で順番を待つ1人の少年の姿をとらえたもの。第2次世界大戦末期に原爆が投下された直後、米海兵隊の従軍カメラマン、ジョー・オダネルさんにより撮影された。法王は今回、カードの裏に自身の署名とともに『戦争が生み出したもの』という言葉に記載するよう要請した。写真の内容と由来は短いキャプションにより説明。『若い少年の悲しみはただ、血のにじんだ唇をかみしめるその身ぶりの中にのみ表現されている』などと記している。米議会図書館の記録によれば、オダネルさんは4年間をかけて両都市の戦後の様子を記録した。一連の写真は本の形で出版されている。CNNのパチカン専門家、ジョン・アレン氏は自身のウェブサイトで、『新年を前にこの写真を公開したことで法王の立場に何か実質的なものが付け加わるわけではないが、フランシスコが年末年始の休暇期間中に特定の画像を配布するよう依頼したのは今回が初めてだ。これは法王が、写真のメッセージが今特に重要だと考えていることを示唆している』と述べた。」（『焼き場に立つ少年』の写真、ローマ法王が配布を指示） CNN 2018年1月1日）
9. イーグルストン、p.49.
10. イーグルストン、p.60.
11. イーグルストン、p.63.
12. イーグルストン、pp.66-67.
13. ジェイク、スラヴォイ 中山徹（訳）『信じるということ』 産業図書、2003年、p.41.
14. イーグルストン、p.67.
15. イーグルストン、pp.69-69.
16. イーグルストン、pp.73-89.
17. イーグルストン、pp.89-94.
18. イーグルストン、pp.99-100.
19. イーグルストン、p.100.
20. イーグルストン、p.100.

21. 石田雄 『記憶と忘却の政治学』 明石書店、2000年、p.246.
22. 石田、p.268.
23. 石田、p.291.
24. リクルール、ポール 久米博（訳）『記憶・歴史・忘却（下）』 新曜社、2005年、pp.312-318.
25. リクルール、p.315.
26. 「安倍晋三政権が政府の歴史認識を巡る新談話を検討する背景には、過去の植民地支配と侵略を謝罪した『村山談話』を実質的に見直し、未来志向で侵略色を薄めたい安倍首相の歴史観がある。ただ歴史認識を変更すれば中国や韓国の反発も予想される。内閣として村山談話を踏襲する姿勢を強調しつつ、有識者会議で外交への影響を見極めながら慎重に議論を進める構えだ。」（『未来志向で歴史再評価 『安倍談話』へ有識者会議』日本経済新聞 2013年1月5日）
27. 「共同体—共同体と求められる『ヒーロー』」（青木順子 『「虚構世界」と「現実世界」—「小説を読む」と「異文化コミュニケーションを学ぶ」を繋ぐ』大学教育出版、9章 2007）引用にあたって、数か所、語句の変更をしている。
28. Jones, Wynne Diana. *Howl's Moving Castle*, Harper, Collins, 1986. 原文を抜き出している場合は、（注）をつける代わりに、引用箇所の後に頁を記す。邦訳は、筆者自身によるものである。
29. "Miyazaki provides another howling good time" *Daily Yomiuri*, November 18, 2004.
30. "A Positive Pessimist" *Newsweek*, June 27, 2005.
31. 赤坂憲雄 『異人論序説』 筑摩書房、1992、p.21.
32. 赤坂、p.22.
33. 赤坂、p.22.
34. 「あらゆる共同体、または人間の形造るすべての社会集団は、共同性の位相からながめるならば、こうした<異人>表象=産出、そして内面化された供養としての制度によって制御されている、とかんがえられる。たえまなしに再生・反復される共同体の深部には、ただひとつの例外もなく、社会・文化装置として<異人>という名の“排除の構造”が埋め込まれ、しかも、同時にその存在自体がたくみに秘め隠されている。」（『異人論序説』 赤坂憲雄 筑摩書房、1992、pp.22-23.）
35. 井上達夫 『他者の自由』 創文社 1999、p.227.
36. ブランショ、M. 西谷修（訳）『明かしえぬ共同体』、筑摩書房、1997、p.202.
37. ブランショ、p.202.
38. デリダ、J.カプート、J.D.（編） 高橋透他（訳）『デリダとの対話』 法政大学出版、2004、p.188.
39. デリダ、カプート、p.169.
40. デリダ、カプート、p.167.
41. 青木、2007、pp.151-152.
42. フロイト、中山元（訳）『幻想の未来／文化への不満』 光文社 2007、p.189.
43. フロイト、2007、p.188.
44. フロイト、2007、pp.188-189.
45. フロイト、2007、p.281.
46. フロイト、2007、p.282.
47. フロイト、中山元（訳）『人はなぜ戦争をするのか エロスとタナトス』 光文社 2008.
48. フロイト、2008、p.94.
49. フロイト、2008、p.94.
50. フロイト、2008、p.16.
51. フロイト、2008、p.95.
52. フロイト、2008、p.31.
53. フロイト、2008、p.32.
54. フロイト、2008、p.37.
55. フロイト、2008、p.37.
56. フロイト、2008、pp.37-38.
57. バトラー、ジュディス 清水晶子（訳）『戦争の枠組み』 筑摩書房 2012、p.54.
58. バトラー、p.58.
59. バトラー、p.59.

- 60. バトラー、p.64.
- 61. バトラー、p.218.
- 62. イーグルストン、p.472.

〔2018. 9. 27 受理〕

コントリビューター：青木 克仁 教授（生活デザイン学科）

